2/20

道標

記憶の中のおばちゃん

いけずの陰に優しさ

村川　庸子
敬愛大国際学部教授

NHKの朝の連続テレビ小説「てっぱん」で、富司純子さんが演じるちょっといけず（意地悪）な大阪のおばちゃんを見ていて、思い出した人がいます。5、6歳のころの記憶ですから、どれほど正確かは分かりませんが。

当時、私たち一家は父が勤めていた会社の大阪出張所で暮らしていました。お隣はタオル問屋で、大勢の丁稚（でっち）どんが忙しく立ち働く活気のある店でした。私はその店の緊張感が好きで、たびたびひとりで遊びに行っていました。店の隅にテレビがあり、私は一つの番組に夢中になりました。

ある日、テレビの前で待ち構えていると、店のおばちゃんが出て来て「庸子ちゃん、ここで何してんの？　このテレビはおばちゃんのやから、あんたは見られへんよ」と告げました。パニックでした。その瞬間の切なさを今も覚えているくらいです。

次に覚えているのは、番組のあらすじを一生懸命、彼女に説明していると行きが変わりました。「それ、まだ見てないところやろ。なんで分かるねん？」。難しい質問でした。「きっとそうだと思う」としか答えられませんでした。「やっぱり、見せてやらへん」と宣告され、がっかりしました。

放送時間が来た時、彼女が急に「買い物し忘れたものがある」と言い出しました。「おばちゃんが帰るまでは見てても ええよ。でも帰るまでやからね」。そうくぎを刺して、彼女は去りました。ハラハラしながらテレビを見ましたが、その日、彼女はとうとう戻ってきませんでした。次の日、おばちゃんが聞きました。「庸子ちゃん、それで、あの兄ちゃんは帰ってきたんか？」。帰ってきたと答えると、彼女は黙って行ってしまいました。

昨年「トイレの神様」という歌がヒットしました。核家族化が進んで、孫が祖父母と暮らすことも少なくなった現代、若い女性歌手が歌う祖母との思い出が心にしみます。ただ、昔は祖父母だけでなく、周囲に子どもを取り巻く大人が大勢いたように思います。私にとっての「おばちゃん」もそのひとりでした。母の話によれば、毎日のように幼い私の様子を見に来て、買い物にも抱いて行ってくれたそうです。母とは違う誰かに抱かれ、市場でその人とお店の人が私のことを話している場面がもっと古い記憶にあるのですが、彼女だったのかもしれません。

5、6歳の子ども相手に誰があんなに真面目に話をしてくれるでしょうか。おばちゃんの思い出が何だか甘酸っぱいのは、子どもながら、いけずの陰に隠れた優しさを感じていたからに違いないと思うのです。保育園やこども園など子育ての環境を整えるのは大切なことですが、何よりも私たちがあの「おばちゃん」たちのように、ひとりひとりの子どもに真剣に向かい合うことと、失ってしまった地域社会を再建していくことの方が、もっと大切なことのように思えるのです。

（むらかわ・ようこ、今治市出身）

ふるさと伝言